

【林委員】

- ・人材確保がうまくいっていないという実態がある。教育の分野との連携も大事ではないか。
- ・デジタル化も重要である。
- ・介護ロボット・ICT・福祉機器の普及啓発及び活用促進は進めていただきたい。

【宮田（伸）委員】

- ・福祉関係、介護関係の学生確保が一番厳しい現状がある。現実的には、高校生が福祉の道に進みたい、就業したいと言っても周囲からブレーキがかかることがある。

【手塚委員】

- ・人材確保について、福祉系高校の話題が出ているが、進路は看護師とか医療系が多い。また、高卒で就職は、生活上の問題のある僅かな方であって、学校の1学年の中でもほとんどが進学と思われる。
- ・まず、高校を選ぶ段階で中学校の先生が福祉系の学校へ行きたいという生徒にどのようにアドバイスをされるのかというところもポイント
- ・外国人の方も日本に来たいという方がまだいるそうだが、外国人に対して富山県のアピールをすべき。石川県は、外国人の技能実習生とか留学生の方に対して、生活費の半額補助だったり、日本語学校の補助だったりを出している。

【村上委員】

- ・「結ぶ・つなぐ・支え合う」ということでは、最近ではやっぱりソーシャルワーカーというつなぎ役の専門職、社会福祉士の役割が非常に重要だと考える。

【惣万委員】

- ・目標について、「誰もが安心・幸せを感じる とやま」、はいいが、下の真の幸せ「ウェルビーイング」、これは誰もが意味を理解するのは難しいのではないか。
- ・介護福祉士になる人が少なく困っているというが、これからはPT、OT方に少し余剰が出るのではないか。

【大橋会長】 目標については、計画の目標の①に「個人として尊重され、自らの意思に基づき、学習、就労等の社会・経済活動に取り組み、個人の自立や自己実現が叶えられる社会」という言葉がうたわれているので、これに絡めて、もう少し今説明のあつことを書き加えるかどうか。

「自分らしく生きる、生きられる社会」、ここでは「社会・経済活動に取り組み」となっているが、実は社会関係も含めて、幸せに生きられるというのはそういうことである。周囲に支えられているし、自分もやりがいを持っている。現在、厚生労働省の言う社会参加、支援ということはもう少し意識したらいいかもしれません。

【吉本委員】 困ったり、悩んだりする人たちというのは、今はやはり発達障害の方が多いのではと感じる。障害を持つ子については、親が今までは何とか抱えてきたが、当然高齢になると抱え切れない。今までは何とか地域社会で対応というか、状況に蓋がされていたが、だんだん外れてきている。ここを支える仕組みづくりをきちんとしていかないといけない。

【高城委員】 計画の目標だが、前段で書いてある、誰もが安心・幸せを感じるということと、真の幸せ「ウェルビーイング」というのは、ある意味被っていると感じる。ウェルビーイングという言葉を入れるのであれば、誰もが安心・幸せを感じるウェルビーイングの向上を目指してとやま型地域共生社会を構築すると。その下の「人や地域の絆づくり つなぐ・結ぶ・支え合う」、これはどうしても入れなきゃならない目標じゃないかなと思っている。

【宮田（伸）委員】 私も実は同じことを感じている。「幸せ」という言葉がダブってしまう。なので、真の幸せ「ウェルビーイング」を生かすとすれば、上は少し言い方を変えたほうがいい。

それともう一つは、現行のところには「つなぐ・結ぶ・支え合う」という、いわゆるアクションの部分があるんですけども、案のところではアクションが見えてこないのので、「つなぐ・結ぶ・支え合う とやま型地域共生社会の構築」というのがよいのではないかな。

あと、社会福祉の教科書の「社会福祉とは？」というところで、「ウェルフェア」ではなくて「ウェルビーイング」とされているものが、ようやく県の計画にも出てきたということは、それだけでも非常にいいことだと感じている。

【宮田（求）委員】 地域社会の中で今までは何とか抑えられてきた人たちが、地域の結びつきが弱まる中で問題が顕在化してきているということが今の最大の問題

それ支えていくということを今回の改訂版ではより強く打ち出さないと、前回と同じような章立てで構成するというのは違う

もしこの計画に反映させるとすれば、ICTとか介護ロボット活用の目的は今の案だと介護の質の向上とされていますが、そうではなくて、介護職員の負担軽減にしたらどうか。

【宮田（伸）委員】 事業主体で言えば、社会福祉法人の連携とか、統合とか、そのようなことも頭に入れておく必要がある。その場合は、行政による何らかの支援がないと、逆に利用者側の不利益になってしまうことがあると思う。

それから、社会福祉法人の地域貢献事業、これも地域共生社会を実現していく上で、本当に大事な視点である。

【大橋会長】 先ほど宮田求委員が言われたことだが、従来の県民福祉基本計画を基にしながらも、新たな方向で再編成をどうするかという部分になるんですが、まず最初の計画をめぐる現状と動向で、現状のほうはいろいろ書いてあるが、動向、あるいは今後あるべき課題みたいなことについて少し書き込んだほうがいいのかというのがある。例えば惣万委員さんの言われたとやま型デイサービスの発展形態としての全世代対応型サービスの開発とか、そういうことが今求められてきているのではないかというのはあると思います。

現状と動向の真ん中の辺に子ども等の権利擁護と書いてあるが、権利擁護に対する意識の高まり、これをもっと協調して、本人の意思確認だとか本人の意思表示だとか、そういうものを尊重するということがないといけない。

概要でなく後の各論で入っているが、在住外国人だとかLGBTなどの社会的少数者への支援、あるいはインクルージョンという問題も少し書いておかないといけない。

地域共生社会の実現（地域における包括的支援体制の整備）だが、包括的・重層的支援体制の整備と同時に、地域共生社会を実現していくためには、先ほども述べましたが、全世代対応型サービスの在り方の検討だとか、個別ケアの徹底みたいなことをもっと意識しないといけないのではないかということがある。

ウェルビーイング、それは使ってもいいのではなか。国際的には使われている言葉で、要するに幸福追求、その人らしく生きる、そういうものを保障し、支援していくということから、富山県民福祉条例第3条と書いているので、条例そのものを変えらるとなると難しいかもしれないけれども、この中身のところは、全世代対応型とか個別ケア型とか、本人、利用者の意思の尊重だとか、こういうのは少し強く打ち出してもいいのではないかと。そうすると、ウェルビーイングの中身がもう少し明確になる。

その他、人口減少社会、地域における福祉サービス提供のシステムの問題をかなり真剣に考えないといけないところに来たと思う。

社会福祉法人の経営基盤の強化では、連携法人の問題は触れておく必要がある。

情報のバリアフリーの推進のところは、6月29日の意見交換会でも出たが、障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法に触れるべきではないか。

また、心のバリアフリーの推進は主に精神障害を想定していましたがけれども、LGBTだとか外国人へのヘイトスピーチというのはかなり深刻になってきているため、書き込みが必要かと思う。

在宅・施設サービスを相互に活用できるというところでは、つまり、過疎が進んでいるため縦割りではなく、「小さな拠点」をあちこちにつくって、それは子供も障害者も高齢者も全部使えるようにしましょうよという過疎地域なりの対策というのが出てきている。

介護ロボット・ICT・福祉機器のところは、職員の負担の軽減が目的だと思う。ただ、これは生産性向上で配置人員を減らすことが目的のように見えているので、質の向上をしてほしいと意見が出ている。新しい人材を求めるんじゃなくて、現にいる方々に学び直しの機会を提供して、リカレント教育をすることがすごく大事なのではないかと。

第2章のⅡ-6、(4)の買物代行だとか、移送サービス等の生活支援サービスのところで大切なのは、終末期・死後対応サービスの充実を図らないと、独り暮らし高齢者とか独り暮らし障害者の終末期対応、死後対応がもうできなくなっているのでは。今、行政では横須賀市などが先駆的にやっている。社協では、琴平町社協とか福岡市の社協など。

それから、Ⅲ-4の高齢者、障害者等の就労支援は、多様な就業環境づくりの推進と書

いてありますから、言葉としてはあるのですが、精神障害とか発達障害の人たちの短時間労働の意義というものがものすごく見直されていますので、記載が必要だと思う。

また、在宅サービスのところで言いました介護保険の横出しサービス、これは当然必要になってくると思われる。

続いて、第3章 地域で支え合う「しくみづくり」の中で、難聴高齢者と鬱病と認知症の相関性の問題が相当言われるようになってきまして、補聴器の問題というのはかなり深刻で、補聴器の購入補助まで入るのか、あるいは、できるだけ耳の健診ということを行うのか、いろいろな対応策があるが、少し書き込まないといけない時代である。

それからあと、市町村の地域福祉の推進支援、これは本当に大切。

包括的・重層的支援体制の整備を市町村にやってもらうためには、どういう手だてがあるのか、ぜひその辺は少し皆さんに考えておいていただいて、次回るときにでも少し膨らませていただければありがたい。

介護人材の問題というのは、正直なところ、特効薬はないので、1つは高校福祉科の問題だとか、私は、一番いいのはやっぱりケアワークというのは魅力があるんだよということはどう伝えるかということで、そのためには個別ケアと福祉機器の利活用というのが大事だろうと思う。

介護ロボットよりも福祉機器、まずリフトなんかをしっかりと使ってもらって、腰痛をなくすと。つまり、辞めていく方の多くは腰痛から離職している。腰痛予防でまずリフトを徹底的に使ってもらうということじゃないか。リフトというのはぴんと来ないですけど、介護ロボットのほうが格好いいからすぐ介護ロボットと言っていますけど、まずはリフトだろうと思います。

【大崎委員】 今のICT化でタブレット、キーボードは難しいが、タブレットで指タッチでやっていくことは、かなりの中高年の方が対応できる。

実を言うと、Wi-Fi環境を整えるということがとても大事なので、ともすると、機器よりもWi-Fi環境を整えることにコストがすごくかかってしまうときがある。なので、この環境を整えるということも対象に考えていただけると進んでいくのかと思う。

【大橋会長】 ICTとインカムとタブレット、これだけでかなりケアの科学化が進むという話があります。重装備のロボットよりもまずW i - F i 環境があって、インカムがあって、それで見守りセンサーなどがあって、タブレット、これだけでも随分違うのだと思う。

(以 上)